

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第 1 回

第二部 若おかみ台湾に行く (要旨)

平成 22 年 6 月 26 日

講師：令丈ヒロ子

若おかみは小学生！（青い鳥文庫）

講談社青い鳥文庫で「若おかみは小学生！」という、小学生の女の子が温泉旅館の跡継ぎになり、いろいろな接客トラブルを解決するというお話を書いています。現在 14 巻が出たところです。台湾の三采文化出版からこのシリーズを翻訳して刊行したいというお話を頂き、大変うれしく思いまして、出版社の方にお会いすることになりました。

台湾版・若おかみシリーズ

台湾版「温泉屋小女将」の表紙は日本版とほとんど同じです。装丁やイラストもそのまま使っています。小学生の教育関係や児童書の作品は教育関係の推薦を頂きたいので、黄色の帯に台湾の教育者の立派な先生方が推薦してくださっています。

台湾版・若おかみが生まれるまで

三采文化出版とのお話のときに、台湾の温泉の話になり、青い鳥文庫の編集長が、せっかくなら若おかみが台湾の温泉旅館で修行する話にしたらどうですか、と提案すると、台湾の編集長の方が、それだったら台湾の子どもたちと日本の子どもたちが友達になり文化交流する話なんてどうでしょうかと提案しました。お酒も入っていたので、それはいいですねと喜んですぐ話を決めたのですが、酔いがさめた後にえらいことになったと思いました。日本式の温泉の入り方自体が、日本軍が持ち込んだものなので、台湾と日本の歴史ははずせないし、台湾では今そのことをどう思っているのかとか、考えれば考えるほどいろいろな問題が湧いてきました。

また日本では児童文庫やハードカバーという形式がある一方、台湾では読み物は日本でソフトカバーといわれているものが主流であり、文庫だからどうという意識が余りない、という出版の問題もあります。

台北の書店・YAの棚：若おかみと黒魔女さんが...

台北の本屋さんでは、若おかみと黒魔女さんが一緒に並んでいます。横にあるのが、香月日輪さんの「妖怪アパート」です。ヤングアダルトのコーナーと児童文庫が一緒になっていたり、やはり勝手が違います。「若おかみ、台湾に行く」という話を書くにしても、読者は何歳くらいでどのように受け止めてくれるのか。日本の今までの「若おかみ」の読者にももちろん面白く読んでもらいたいけれども、別の文化を持つ台湾の小学生の子たちにも読んでもらいたいのので、とても難しい仕事でした。

台北市・北投国民小学校

台北市の北投（ペイトウ）温泉という由緒ある温泉地の、北投国民小学校に行きました。校長先生の協力で、子どもたちに「若おかみは小学生」を事前に読んでもらい、子どもたちの忌憚のない意見を聞けました。いかにも日本的な古い温泉旅館の設定で、主人公のおっちゃんは幽霊も鬼もどんどん接客するのですが、その辺はどういうふうを受け止めてくれるのかと思ったら、子どもたちは余り抵抗がなかったようです。日本語や温泉に対しての親しみが、何となく土壌としてあったということです。また、日本のマンガに対してすごく好意的でした。校長先生が「若おかみは小学生」は人間関係が良く描けていると言ってくれました。主に接客のトラブルなので、一度は主人公が怒ったりけんかしたりするのですが、必ず相手の立場になって考え、その問題に詳しい子には、仲が余り良くななくてもすぐに意見を聞きに行くところが良かったと言ってくれました。

北投国民小学校・授業風景

そこで国語の授業に参加させていただきました。三国志がテーマで、敵に囲まれて絶体絶命の危機のときに琴を悠然と弾き、落ち着いている姿を見た敵は、すごい戦略があるのだろうと思ひ引いていったという諸葛孔明の知恵を学ぶ授業でした。先生が諸葛孔明はどうやって危機を乗り越えたのか尋ねると、子どもたちが「昨日の敵は今日の友です」とか、「楽観」「勇敢な心」とか答えていくのです。その勢いがすごく素晴らしい授業でした。

次に、おっちゃんは無理難題をどう解決したのか先生が聞くと、ライバル旅館に協力を求める態度が素晴らしいとか、落ち込んでみてもすぐに立ち直って行動したとか。この授業は、子どもたちが友達関係や家族関係で思うようにいかないことがあったときに、どのように対処したらよいかという具体的な知恵、生きる知恵を受ける授業だったので大変驚きました。

台湾の場合、児童書の作家は教育者が多いし、先生の推薦がないと大人が手に取りにくく、子ども自身が選ぶことができない状況なのでどうなのだろうと思っていたのですが、この国語の授業を聞き、知識を得るだけでなく、生きる知恵につながることを評価してもらえるので

あれば、何かうまく書けるかもしれないと思いました。

小学校でおはなし会

おはなし会で子どもたちの質問に答えました。作家にはどうやってなるのですかとか、日本の温泉旅館の女将さんが活躍する話なので、日本ではこんなに女の人が皆強いのですかとか、いろいろ面白い質問もありました。それから日本では「若おかみ」シリーズで人気のキャラクターが台湾ではそうではないことも分かり面白く感じました。

本文のルビをくらべてみると...

台湾版はルビがふられていません。「若おかみ」シリーズは小学校3年から6年生くらいがメインなので、青い鳥文庫ではルビを入れているのですが、台湾ではルビがあるのは小さい子ども用だという印象があるようです。それから子どもの本のイメージに求めるものの違いもあると思います。台湾では、勉強になるもの、教育に良いものが求められます。青い鳥文庫などのイラストはライトノベル的なアニメのような絵なので、ネックになるのではないかというような話も聞きました。ただ、コミックなどはすごく受け入れられています。

若おかみ・日本と台湾

統治下の問題などどのように文章化したらよいかと思い、師匠の山中恒先生『あばれはっちゃん』などを書かれた先生へ相談しました。そうしたらこのシリーズは娯楽ということをお忘れないでほしいと言われました。「その中でできる範囲のことでいいんじゃないの」と。

考えまして、結局こういう作品になりました。日本の統治下の温泉がこうであったということも取り入れました。その温泉を守ろうとする人と、それをリゾートスパにしようかという問題も出ています。それから幽霊に対するイメージをいろいろ調べ、ゲイという成仏できないゾンビのようなものが見える女の子とおっちゃんの交流なども入れました。まだ結果は出ていませんが、これから翻訳されるので台湾の方の感想を聞けたら良いなと思っています。

最後に私、台湾の取材の後に不安になり、台湾で有名な占い師さんのところへ行き、この本は台湾の方に喜んでいただけるようになるかを聞きました。占い師さんから「運気がちょっと上がってきているので、まあ良いのではないかな。バラの花の浮いたお風呂に入りなさい」と具体的な指示があり、しばらくはバラのエキスの入ったお風呂に一生懸命入っていたので、それが効いたら良いなと思います。

台湾の方に喜んでいただける作品になったかどうかはまだ結果が出ていないのですが、そうなるが良いなと思っています。ありがとうございました。